木下川の子ども

1957年度

～

1986年度

5年

一九五七（昭和32）年度

ぼくの夢

夢というものは、自分の思う通りには、いかない。何か、面白いものを見たいなあと思うと、こわいものが出て来る。こんどは、こわいものを見ようとすると、おもしろいものが出て来る。夢はほんとうに面白い。こんなことは、うそだと思っていても、なんだかこわくて目がさめる時がある。まだ暗かったのでもうひとねむりと思って目をつぶると、こんどはどろぼうが入って来て、ぼくをかついで、グランドの方にいく。グランドにおかれた、ぼくは「さむいなあ。」と思って、目をさましたら、ふとんをけとばしていた。外を見たら明るかった。もうすぐに、おこされる時間だと思って、ねたふりをしていると、おかあさんが、「もう、おきなさい。」と言ったが、ふとんの中で返事をしないでいると、二度目にふとんをまくられてしまった。ぼくはいやいやながらおきた。

一九五八（昭和３３）年度

家の金魚

私の家の金魚は、私の家へ来てから、もう二年がたちます。みんなどれも勢いがいいのばかりです。

私の家のは、金魚ばちではなく、池にいれています。その池は、二年前お父さんが作った池です。まわりの石は、お父さんが、ほうぼうから、買いあつめてきた、黒ぼくばかりです。もう石には、こけが生えています。

お父さんはいつも夕方になると、池に新しい水を いれます。金魚は、赤ばかりではありません。赤、黒、青、むらさき、白、だいだい色があります。金魚の種類は、ふつうの金魚、しぶ金、ひどい、でめ金、らんちゅう、あずまにしき、りゅう金、その中でも 私の一番すきなのは、、大きな、赤と白の色のまざった金魚で、おっぽが、十糎もあります。いつも、泳ぐ時は、おっぽを、ひらひらと動かして、まるで、金魚の中の、お姫様みたい

です、おっぽの所がひらひらと、ゆれるので、家のお母さんは、その金魚のことを、ドレスの金魚とよんでいます。

この間、私が金魚をかぞえて見たら、五十ぴきもいました。ところが、この間の大水で、金魚が大分流されてしまいました。ドレスの金魚は、助かりました。いなくなったのは、三十五ひきです。私はドレスの金魚が助かったので、私は、ほっとしました。でも、また、ドレスの金魚が、あまりふとりすぎて、おなかのところが、ぷーとふくれてからだが、さかさまになってしまいました。

私は、てっきり、死んでしまったのかと、思ったら、まだ生きていました。今でも、ドレスの金魚は、さかさまになって、泳いでいます。ほんとうに、かわいそうな金魚です。

私はほんとうに、金魚のおいしやがあればいいなあーと思います。

一九五九（昭和34）年度

おてつだい

二十二日の日曜日のことでした。私はおかあさんに「おかあさん、てつだいをしてあげるから、こたつへはいっていいわ。」と いったら、おかあさんは「そう。」と行ってこたつの方へ行きました。八時になって、おかあさんは工場の方へいって仕事をしに行きました。

私はおちゃわんをあらって水がとてもつめたいのでこたつですこし本を読みました。そしたら弟が「おねえちゃん、お金しらない」といったので私は、おかあさんにきいて見たらといった。弟は「おかあさんが、おねいちゃんにさいふをさがしてもらいなさいといった。」といいました。私は「そう」といっておお金をあげました。あたたかくなったので、こんどは、はたきと、ほうきをもって、歌をうたっておそうじをはじめました。しばらくたつと家の中はたいへんきれいになりましたが、私はいくらきれいにしても、また弟や妹がち

らかすのかと、思うといやになりました。

それから十一時ごろになっておかあさんの所へいって私は「おかずはなにをするの。」と きくとお母さんは「そうね肉やさんにいってめんちと、ころっけをかってきてね」といいました。私は、お兄さんにたのんで、肉屋へいってもらいました。お兄さんがかえってきたときは、ごはんのしたくもみんなできていっしょにごはんをたべました。

おとうさんが私のおてつだいをたいへんほめてくれました。ごはんを食べた後みんなはテレビを見ました。テレビを見た後、お父さんとおかあさんはまた仕事をしに行きました。私はおぜんをかたずけて、またおちゃわんをあらい、おそうじをして終りました。

一九六〇（昭和35）年度

おとうさん

ある夜のことです。おとうさんがおばあさ

んの家にいってお酒をうんとのんで帰ってきました。よっぱらってなにもできません。おかあさんがでかけている時なので、わたしと妹でようふくをぬがしているとぶつぶつなにかくだらないことをいっています。ようふくをぬがせて、あんまりうるさいから、ねかしてしまいました。男の人ってお酒をのむと赤ちゃんになってしまう。よっぱらってしまう。よっぱらってしまと、わたしのゆうことをなんでも「はい、はい。」ということをききます。よく朝おきてみるとおとうさんはけろりっとしています。わたしがきのうの夜のことを全部話してやりました。おとうさんは「そうだったかなあ。」と、全々きのうのことをおぼえていません。忘れてしまったのでしょう。わたしはそうしてしまうお酒がだいきらいです。

おばあさんへ

一九六一（昭和36）年度

朝夕大へん涼しくなってまいりました。

おばあさん、おかわりございませんか。お元気なすがたが見えるようです。

夏休みは、大そうお世話になりました。長い間楽しく遊ばせていただきましてほんとうにありがとうございました。

おかげさまで途中無事に、またあつい東京へ帰ってまいりました。

十二時間汽車にゆられたら、秋田ののんびりしたけしきが、アスファルトの道を車が急がしく動くけしきにかわってしまいました。でも私は黒ぐろとした体で九月をまっております。

ますからどうぞごあんしんください。皆で、テープレコーダーからながれるお声を聞いて、なつかしいおばあさんや近所の皆さんのいろいろなことを話し合いお友達のお話もあきることなくしばらく語りつづくことでしょう。

私は列車の人となってからも、目に涙がいっぱいになって一言も話ができませんでした。お話をすればなぜほほをつたってこぼれる

のをどうすることもできなくって、長い旅を楽しませようとしてくれるお母さんたちをこまらせました。

寝台車の旅、田舎の駅についた時十人乗りのバスで、みなさんがむかえにきてくれたこと、先祖のお墓におまいりしたこと、お盆の日のこと、日本海に泳いだことなど、すいかやうりなど、台所にいっぱいつんであってたべきれなかったことが思い出されます。

その中で一番私の心に残っているのは船で八郎潟をまわって干拓を見にいった時のことです。

小高い丘からながめた広い広い湖の夕日にかがやくようすは何とも言い表すことのできない美しいけしきでした。

この八郎潟も近いしょうらい広々とした平野にかわることでしょう。

八郎潟の姿は岸辺に生れ故郷を訪ねる私どもになつかしさをおぼえさせ、また、いいしれぬ淋しさを感じさせられるとお母さんは語

ってくれました。

自然のすがたをかえようとする人間の力の大きさにも感心しました。干拓の大事業が早く出来上る日を待つと同時に今まで私の心をなぐさめてくれた潟がなくなると思うと淋しくもあります。では、おばあさんのけんこうをおいのりいたしまして、ペンをおきます。

読書感想文「坊ちゃん」

一九六二（昭和37）年度

坊ちゃんは、親ゆずりのむてっぽうだった。それでときには、大変な失敗をしたこともある。あるとき友達にピカピカ光る西洋ナイフを見せびらかしたら、友達は光っても切れるかどうかわからないから「君の指を切ってごらん。」とじょうだんにいったら、坊ちゃんは指を、本気で切ってしまった。それは、あまりひどくなかったが、一生そのきずあとが残

ったそうだ、私はずいぶん思いきったことをやったなと思った。私にはそんなまねは、とうていできません。これは坊ちゃんの小学校時代のお話です。ほかにまたこんなこともありました。それは物理学校の卒業間近のことです。校長先生によび出され、四国の中学校の先生になるように、進められて、きらいな数学の先生になった時の話です。四国の学校へ行き先生方にすぐ、あだなをつけた。校長先生には「たぬき」文学士の先生には「赤シャツ」、英語の先生には「うらなり」、数学の主任の先生には「野だいこ」とつけた。

私はこんなあだなをつけた坊ちゃんをいたずらっ子のように、思いました。そしておかしくなってわらってしまいました。これが校長、教頭の耳にはいったら、おこるだろうと思いました。坊ちゃんは、この中でいちばんいいと思ったのは、山あらしとうらなりであったようだ、赤シャツは野だいこを子分のように使って、坊ちゃんとはあまり気が合わな

かったようである、ある日、うらなり君は、学校をてんにんすることになった。坊ちゃんは、このうらには、なにかあると思った。やはりそのとうり、赤シャツと野だいこが、わるだくみをしていたのであった。

うらなり君は、おとなしくまじめだからいくきにはなっていた。坊ちゃんはそれがしょうちできなかった。

うらなり君のそうべつ会の時は、赤シャツはどんちゃんさわぎをした、でもうらなり君は、だまってすわっていた、ぼっちゃんはこのうらなり君をきのどくだと思った。私の思うには、本人がさわいでいないのに、さわぐと失礼だと思った。そのそうべつ会の帰りに、山あらしと二人で、赤シャツと野だいこを、ひどいめにあわせて、どろをはかせた、この時の坊ちゃんの気持ちは、はればれしていたと思います。

一九六三（昭和３８）年度

読書感想文

「ものをぬすむ親と子」を読んで

これはイソップの話で、みじかいけれどたいへんためになると思いました。

子どもがはじめてものをぬすんだとき、母親がほんとはおこるべきなのに、はんたいにほめたので、わたしは母親の心がわからなくなってしまった。

そのうち子どもがちょいちょいどろぼうをするようになり、ついにつかまってしまいました。

むすこは役人に「母にないしょの話がある からよんでくれ。」と、たのみ、親に話すようにみせかけ、耳たぶを思いっきりかみきりました。親は「親不孝め」とおこりました。むすこは「かあさん、わたしがはじめて物をぬすんだとき、なぜおこってくれなかったのですか。そのおかげでいま死けいになるのです。」むすこはそうこたえました。このように

悪いことも大きくなるにつれて大きくなり、気がついたときには、どうしようも、なくなってしまうのだと思いました。

この話は「ものをぬすむ親と子」と書いてあるが物をぬすむのは子どもなのに、なぜだろうと思った。読んでいくうちに、子どもがものをぬすむようになったのは母親がわるいのだから「ものをぬすむ親と子」と書かれているのだろうと思った。

わたしたちのゆめ

一九六四（昭和39）年度

まず、はじめにぼくは、いい学校へいってたくさん勉強します。

おとなになったら、のう外科の医者になるか、理工科にはいり研究しようかと思っています。前には、天もん学者になりたいと思っていました。したが気がかわりました。その理由は、お金がもうからないし夜やるからです。いずれにせよ、みんなよりものすごく努力しなければ

なりません。その点は、がんばるつもりです。医者になったら、この町に、病院の分院をたてます。本院は、丸の内のちかくにたてます。そして、分院の方は、すこし安くします。安くするわけは、まずしい人がしんさつ料をはらえないとこまるからです。

本院の方はふつうのとおりです。それは、本院の町はまずしい人は、数えるほどしかいないからです。また、よさんがあまったらこの町のためにきふします。こういうふうに、自分の病院を大きくして、それとおなじように、この町も住みやすい町にしたいと思っています。

一九六五（昭和４０）年度わたしの家にくるしんせきの人は、バスにのって来ます。でも、おりるばしょはわかるのですが、おりるていりゅう所の名が、わからないのだそうです。でも家の近くになると

におうからすぐにわかるのだといいます。わたしたちは、すみなれているせいかそんなにおいはしないと思います。でも時どき、ぷーんと、なんともいえないにおいがする時もありません。でもしんせきの人が、くさいというのはうそではないことはたしかです。どうしてかというと、この町は、おもに皮の仕事をしょく業にしている家が多いからです。わたしの家の方では大きな皮工場があります。大きな工場は、あまりありませんが、小さいといっては、おかしいかもしれませんが、小さい工場はあんがい多いと思います。

でも学校に通う時など、道のすみや道路のまん中に、皮のかすのようなものが、たまたまおちていることもあります。小さいのばかりではありません。時たま、大きな皮がおちているときもあります。わたしは、きもちがわるいので、かけだしていきます。道のすみにおちていた方がいいと思います。

なるべくごみをすてないようにしていつま

でもすみよいきれいな町にしたいと思います。

一九六六（昭和４１）年度

「雪」

空から真白な花が、

まいおりてきた。

ヒャッ。

氷つくような冷たさ。

しばらくみぬうちに、

家の庭は花ざかり。

葉のない花ざかり。

でも太陽が高くのぼったら

また自分の国へぎゃくもどり。

誰かさんが　さけんだよ。

「また遊びにきてねー。」

雪はなごりおしそうに、

あたたかい太陽に見送られて、

寒いお国へ帰って行った。

一九六七（昭和４２）年度

ぼくの家の仕事

ぼくの家は印刷屋です。朝は九時ごろからです。夜はおそい時で十二時ごろまでしています。

おとうさんは、タイプライターをうったり、かっぱん印刷の字をくんだりします。

おかあさんは、おとうさんのうったタイプの原紙をすります。ぼくが学校からかえってきた時は、仕事べやで、ガタンゴトンと機械の動く音がします。仕事をとりにでかける時は

ぼくもいっしょにつれていってもらうのでいろいろのことがわかります。見ているととてもいそがしそうです。でもちょっとおもしろそうです。夜になってもごはんをいっしょにたべない時もあります。ごはんがすむと、すこしやすんでまたはじめます。十時ごろになると休けいしてお茶をのんでまたはじめます。

おとなってたいへんだなと思います。ぼくもおとなになったら印刷屋になりたいとおもう、そして今よりももっとりっぱにします。

一九六八（昭和４３）年度

作文と詩

作文を書くのは大変だ。今、作文を書いているけれどなかなか題がきまらない。

やっとのことできまっても、少ししか書けない。ぼくは作文がきらいだ。頭をつかうし、字を書くのもやだし、「きねがわの子」に、のったりするからだ。

だけど書かなければ、学校に残ってやらなければならない。だからぼくは、早く帰りたいのでやっている。

でもあまり気がすすまない。それだし、たくさん書かないとだめだからです。みんなはどうか知らないが、ぼくは今ここに書いたとおりだ。ぼくは、時々こう思う。作文なんて作った人にお目にかかりたいと思う。それに作文がなければいいなあと思う。

世の中には、作文が好きな人もいるだろうと思うけれども、ぼくは、作文が、大の大きらいだ。

詩もきらいだ。だけど詩のほうがましだ。

詩は作文より短いし、書きやすい。それにうそのことを書いても平気だからです。作文は、うそのことをかけないのでむずかしいです。それに詩は何の題でもかけるけれど、作文はそうはいかない。だからぼくは作文のほうはきらいで、詩のほうがすきです。

そうはいかない。だからぼくは作文のほうはきらいで、詩のほうがすきです。

一九六九（昭和４４）年度

かがみ

かがみはしょうじきものだ。

こちらがおこれば、かがみもおこる

こちらがわらえば、かがみもわらう。

だけど一つうそがある。

右と左がはんたいだ。

一九七〇（昭和４５）年度

大みそか

今日は大みそか、今年最後の日です。

町の中がたくさんの人でにぎわいどこの家でも正月の準備で、あわただしくなりお店がとてもいそがしくなる日であります。

私の家は酒屋さん。あいにく、今雨がふっています。お父さんはオートバイで配達ができません。だから、乗用車に荷物を積み康子おばちゃんに運転してもらい、お父さんが道を教えたり、荷物を運んだりしています。私とお母さんは、家で注文された品物をそろえたりしています。お店はとてもいそがしく、電話はリーンリーンとなって、私とおかあさんはてんてこまいです。昼食する時間になっても食べることがなかなか出来ません。午後の二時ごろになってやっと食事をしました。

私は午後から、お母さんにお酒をつつむのを教えてもらいやさしいのを手つだってあげました。お母さんはとても喜んで、「助かる

わ。」と言っていました。それを聞いて私はとてもうれしくなってにこにこして手つだって上げました。お店の台の上は、お酒や、コーラ、ジュースなどがたくさんならんでしまって、ならべるところがありません。配達する人が帰って来るのがとてもおそく感じられます。

　雨がやみました。お父さんは、今度オートバイで配達です。私もおばちゃんと二人で自動車に乗って、手つだうことにしました。ビールの一ダースを持って上がる時は重たくて手がいたくなりました。あせもでました。お父さん達は、毎日こういうことをしているのだから本当に大変だなあと思いました。夜になってやっと配達がおわりました。夜十時ごろ夕食を食べながら、テレビを見たりして、今年こそは除夜のかねを聞きたいと思いがんばっておきていました。

　初めて聞くかねの音は、なんとも言えないよい音にひびきます。一日の仕事のつかれも

なおるようなよい音でした。かねがなり終ると、私がまちにまっていたお正月、お正月なのです。

変わっていくいなか

一九七一（昭和４６）年度

私は、一月十四日にいなかへ行きました。学校から帰って来て、すぐ着がえて行った。新らしくできあがった高速道路の新空港線を通って、成田まで行ってそれから茨城まで行きました。

いなかの家の近くに、大きな港が作られていて、家のそばに線路もできて、きてきをならして貨物列車が通っています。港の近くに石油コンビナートや合成ゴムなどの工場もできていて、えんとつから火が出ている所もあります。その火は、一年中出ていると、おかあさんがおしえてくれました。その工場は夜になると、黄色と赤の電気がついてとてもきれいです。工場のえんとつの中に、白いけむ

りが出ていたので、「あれ、工場のけむり。」とお母さんに聞いたら、おかあさんは、「あれは蒸気だよ。」とおしえてくれました。

工場には、たくさんの人が働らいているので、やがて市になるだろうと、この間電車で行った時、両国の駅まで乗って行ったタクシーの運転手さんが言いました。私はなんだかつまらないような気がしました。それは、いなかが東京みたいな都会になってしまったらいなかのような気がしなくなってしまうからです。いなかは、空気がすんでいて、じゃりの道をげたで歩くとじゃりじゃり音のする、こういうのがいなかだとはっきり感じるようなところが私はいいのです。

うちのいなかの家は、えんがわが表につき出ていて、そして入るとすぐだだっぴろいへやがある。食事をする所が、たたみが半分、コンクリートの所が半分でそのほかのへやが四つある広い家です。屋根はわらぶき屋根ですが。やがてこの家も、港のためになくなって

しまうそうです。そうしたら、いなかの家も東京みたいな家になってしまうでしょう。

机

一九七二（昭和４７）年度

もうあれから六年にもなった。ずいぶんかったなあ、この机、買ったときはまだ学校にあがっていなかったが、何んだかとてもうれしかったのだけおぼえている。でも、今はまん中へんがゆがんでしまった。それは、机が古くなったし、ぼくたちがよくのっかっていたからだと思う。けんかしてはよく机をけったり上にのったりしたっけ。机のまん中によく見るとセメダインのあとがある。これは使いっぱなしにしておいて知らないでのってふんづけちゃったんだっけ。セメダインのあとだけでなく机の上はなにがなんだかわからないくらい落書きがしてある。かいじゅうの絵、仮面ライダーあとはごちゃごちゃーー。前の本だなは、本が今にも落ちそうにおいてあ

る。ちっともそうじしないから、ほこりだらけだ。本だなについているけいこうとうにも落書きのあとがある。仮面ライダーの絵、バカなんて書いてある。多分弟とけんかして頭に来て書いたのだろう。引き出しだって、シールがゴチャゴチャにはってある。パンダが三つそのほかいろんな動物、気にいったシールはここにはない。しまってある。だから、考えなしにはったものだ。きずだってついている、ところどころメッキもはげてきた。すみの黒いあと、これはこの間の書きぞめの時こぼれたやつだ。全体に古いからだろう。少しガタガタする。この机、ずいぶんそまつにしたな。でも今日だって、きのうだって、机のおせわになっている。明日だってそうだ。いつもいつもこの机におせわになっている。ぼくは机に、「ここまでがんばってありがとう。」といいたい。しかしよく持ったなあと思う。

一九七四（昭和４９）年度

おじいちゃん

おじいちゃんは、せいが高くて、顔は下ぶくれ目だ。一見、いかりや長介に似ている。ぼくと同じ、うさぎ年で、今年は七十二才になるが、とても七十二才には見えない。家に来るお客さんに、「治三郎さん、若いですねえ。」と言われると喜んでいる。おじいちゃんは、荒川からぼくの家まで、歩いてきているから

たっしゃで若いのかも知れない。でもこのごろ神けいつうで毎日はこない。趣味は新聞を読むことと、旅行と庭いじりだ。新聞は自分の家でも、読んでくるが、家に来ても読んでいる。旅行に行くと、ばからしいおもちゃばかり買って来るが、いつも忘れないでかならず、おみやげを買ってきてくれる。庭いじりもすきだが、庭によくきたないゴミをうめるのでおばあちゃんにおこられる。そういう時、「おれが、せっかくうめたのに。」

とおこる。おじいちゃんは、肥料にするつもりらしいが、ビニールのふくろやくさらないものまでうめるので、おこられるのだ。お母さんが、ぼくのことをくどくどおこっていると、おじいちゃんはお母さんにむかって、

「おまえの小さい時は、どうだった？。」

と言う。そんなときお母さんは、つばを飛ばしながら、

「子供の前でそんなことといわないでよ、昔と今とはちがうんだから。」と言って、お母さんとけんかになる。でも、ぼくたちにはやさしい。大きいおばあちゃんと、おじいちゃんはよく昔の話をしている。昔をおもいだしているのかもしれない。おじいちゃんの欠点は、

「きちんと、ちゃんとやれ。」

とよく言うことだが、おじいちゃんも、きちんとちゃんとやればいいと思う。たとえば畑を見に行っても、おじいちゃんの畑は、くさが、いっぱいで、一番きたない。でも、このごろは神けいいつうで畑仕事もやれないので、

早くよくなって畑のじまんや、ぼくや妹を成田山や浅草に連れていってくれるといいと思う。

一九七五（昭和５０）年度

一月十四日（火）

母のいとこの、おねえさんのところに、故障したオモチャを見てもらいに行った。

そしたらとてもよろこんだ。さっそく見てもらった。そしたらなんともなかった。

ぼくは、おねえさんに、小さいころから、だいぶせわになっている。ぼくは、このおねえさんがいちばんすきです。だってこのおねえさんにオモチャを買ってもらったりした。

帰りに千円くれた。ぼくはこのお金でいままでのおれいをしようと思う。きっとよろこぶだろう。

一九七六（昭和51）年度

二月二十四日（木）

午後から、文花小学校へサッカーの試合に行った。向うの学校までの道のりは、そうとうあった。あまり歩いた事はないので足がいたくてしかたなかった。やっと着いた。回りはそんなにきたなくて、校舎はせまく、運動場は広く土はどろどろだった。男子はあみをはり、女子は練習した。文花のせいとは、やっと来た。体にゼッケンをつけていたので私達もつけた。試合が始まった。女子が先で、相手は五年生の女子だと思っていたけれど、クラブの男子だった。みんなおもしろそうな人達ばかりだ。時間が終わってしまった。〇対〇の引きわけ、男子はなかなかはく力があり、みんなどろだらけでがんばっていた。男子もおわった。私は自分のことみたいにうれしかった。また、いつか、他の学校といっしょにサッカーの試合をやってみたい。でも、とてもつかれた。

一九七七（昭和52）年度

十月十日（月）　曇り時々雨

親子ハイキングでくぬぎ山フィールドアスレチックへ行った。これはだいぶ前から楽しみにしていたものだ。それはアスレチックだけが楽しみだったのではなく、ぼくは鉄道がすきで前から一度、新京成に乗ってみたかった事もあったからだ。

アスレチックでは木登り、橋わたりなど、ふだんできない事をたくさんやった。

帰りにちょうどよく記念切符を発売していた。おかあさんにたのんで買ってもらった。

今日は一日中ついていた。

一九七八（昭和53）年度

二月十四日（水）

今日はバレンタインデーでした。私もチョコレートを男の子にあげました。一人に三百五十円一人に百円です。加藤先生には五十円

のチョコレートをあげました。今日から一ヶ月たつとホワイトデーです。三月十四日はどうなってるかな。

一九七九（昭和５４）年度

「二月十五日」

うちに帰ってきたら、おき手紙がおいてあった。見たら、「ふとんとりこんどいて・・母より」と書いてあった。おねえちゃんあてだけど、当分、帰ってきそうもなく、わたしは、急いでとりこんだ。だけど、ふとんは、とても重く、運ぶてまがかかった。

それでよろめいたり、落としそうにもなった。ついでに、洗たく物もとりこんでたたんだ。こんなに重いのにお母さんはよく運べるなあと思って感謝した。

一九八〇（昭和55）年度

二月十九日

歯医者さんへ行った。何をやるのかとどきどきしていると、銀をつめることになっていると、銀をつめるそうだった。「はいかんでー」「はいあいてー」のくりかえしだった。何か白い物をぬって銀をつめた。そしたらすっぱいかんじだった。そうしたらとなりの席に4才から5才ぐらいの男の子が来た。初め「やだやだ」と言って鳴きだした。私が見ていると「ほーらお姉さんも見てるよ、わらわれるよ。」といっていた。そして受付にでてその男の子に「おねえさんいたくなかったよ。」といってあげた「ぼくもいたくなかったよ。」といった。

未来の学校

一九八一（昭和56）年度

未来の木下川は、朝、学校へ行く時ワープで行けて階段は、エスカレーターで、戸が自

動ドアーで、寒くなったら、一人でに暖房がきいて、暑くなったら、すぐに冷房がきくようになっている。先生はロボットで机はテレビになっている。ろうかは、一人でに動く。学校は、建て直して百階建て。一人に一つづつ教室がある。毎日、いろんな国へ給食を食べに行ける。それから、遊びは、背中に羽を付けて、いろんな所を飛びまわれる。自動車は、磁石の力で浮いて走る。遠足は北から南、どこへでもたったの十分で行ける。もしこれが本当にかなったらいいな。ワープもできて、階段もエスカレーターで、戸が自動で、暖房が一人でに。先生はロボット。いろんな国へ給食を食べに行ける。机はテレビ。学校は、百階建て。教室は、一人に一つづつ。ああああ、これが全部かなったら文句なしなんだけどなあ。

一九八二（昭和57）年度

一月十八日（火）晴れ

今日は、新しい理科の先生が来ました。名前は、山下智子先生です。

五つ子ちゃんと同じ名前です。

今日の、理科の勉強は、十分しかしません でした。あとの時間は、自己紹介などをしました。

私から、見た、山下智子先生は、なんとなく、きびしそうで、よく、遊んでくれそうな先生に見えました。

そんな、すてきな女の先生で、良かったと思っています。

もうすこしで、山下智子先生も、私たちの、名前を覚えてくれると思います。

これからも、先生と、みんなで、よく、理科の勉強を、学ぼうと思います。

でも、本当に、理科の勉強が、よく、できるかどうかは、わかりません。

一九八三（昭和58）年度

今日五時ごろ、Kちゃんにおさいふを買いに行くのにつきあってもらってからそろばんに行った。ここまでは元気だったのに……。

それからテストを返してもらったら、Kちゃんは合格じゃなくて、私が合格しちゃったので、Kちゃんはなんかさみしそうだった。

そして、とうとう帰りまで話さなかった。

私が「いっしょに帰ろう。」といったら、さみしそうな声で、「う・・ん。」ていっていた。

四級と三級は時間は同じだけど、やっぱり教科書と暗算の本がちいがうからいやなんだなあ。

こういうときはどうしたらいいんだろう。

一月十日（火）

Kちゃん元気だったあ。よかったあ。

一九八四（昭和59）年度

二月一六日（土）

今日は、お姉ちゃんの誕生日です。私の誕生日は、三月一九日。誕生日は、プレゼントはたくさんもらえるし、ケーキも食べられるので、私は誕生日が好きです。でも、今日のお姉ちゃんの誕生日では、ケーキはないので、残念です。そして、私とお母さんと新太と十二歳になるお姉ちゃんとで誕生日をやりました。歌を歌ったりゲームをしたり、とってもにぎやかにできたので、良かったと思います。その中でも一番はりきっていたのは、新太です。私が歌を歌うと、新太はそれに合わせて踊るので、とってもおもしろいです。そして、最後に私が、お姉ちゃんにプレゼントをあげました。お姉ちゃんは、喜んで、

「ありがとう。」

と言いました。私があげたプレゼントは、ミッキーマウスの小物いれです。お姉ちゃんも、私があげた、プレゼントを、気に入ってくれたので良かったと思います。

一九八五（昭和６０）年度

二月二十六日（水）

今日の夜に、ぼくの誕生会を、やりました。その誕生日会のまえに妹とぼくは、けんかをしてしまいました。ぼくは妹のことをけっとばし、妹はぼくにものをなげました。

そして、へんな気分で、誕生会をやりました。ぼくは、母に、プレゼントがわりに二千円もらいました。ぼくはてっきり妹の誕生日にプレゼントをあげていないからプレゼントはくれないと思っていました。ところが、千円もかけて文房具を妹がぼくにかってくれたのです。その時「さっきけっとばさなければよかったな。」と思いました。そして、あとで母にそのことをいってみるとなんと妹は、母がようじがあっていけないのに、むりやりたのんで文房具やに、いってもらったそうです。ぼくは、その話を聞いて、ほんとうにうれしかったです。

一九八六（昭和６１）年度

十一月八日（土）

今日は、大林さんと私で遊びました。なにしたかというと、編みものをして、遊びました。編みながら、荒川に、行きました。かわらの方へ行ったら、アクエリアスのびんの中に手紙が入っていました。読んでみたら、「お手紙ください。」と、書いてあり、住所と、名前も書いてありました。名は、吉田大起と、友香で江東区に住んでいるようです。さっそく手紙をうまく書きました。きれいに書いたのでとても手がいたくなってしまいました。そしてふうとうを買ってきて、切手をはりポストへ入れました。手紙の中には、「私の近くに荒川という川があります。そこでみつけました。あと、Ａさんもまえ見つけたというはなしをききました。写真送ってください。あと、友達になろう」と、書きました。返事が楽しみ、そのことあした、先生や、みんなにじまんしようかなぁ～と思いながら夜、出し

ていました。